

第 10 回国際協働プロジェクト  
**The 10<sup>th</sup> International Student Action Project**  
活動報告

ISAP10 財務部長 岡山大学 4 年パウエル井上潤

## 1. 第10回国際協働プロジェクト決算報告

### 収入

項目	金額	備考
参加費	1,460,000	一人73,000×20人
財団より	150,000	共立国際交流奨学財団 (国際ボランティア枠)
I. S. A. より	120,000	
OBOG より	6,641	

合計	1,736,641
----	-----------

### 支出

項目	金額	備考
現地参加費	1,360,000	68,000×20人
団体通信費	14,496	現地のWi-Fi代
交通費援助	232,000	遠方支部の交通費援助
企画費	31,710	現地の企画で使用するものに使用
下見援助	98,000	3月に行った現地下見への援助

合計	1,736,206
----	-----------

収支差額 (繰越金額) 435円

## 2. 企画者（中井颯人）の感想・総括

今年度の ISAP はテーマを『自分らしく』とし活動を行なってきました。ここでいう自分らしくとは、本当にやりたい事を見つけ、日々それに挑戦し毎日を楽しく過ごす事を意味します。

そして 12 日間の国外活動を終え、あれから約 1 ヶ月が経ち思うことは、私たちの活動が意義ある活動であったのかという疑問です。勿論この結果には様々な意見があることでしょう。そんな中実行委員長とし、この活動を 1 番長く見てきた私の結論は“意義ある活動”であり、これからも“継続されるべき活動”であるということです。国外活動を終え分かることは、人の成長です。協働やホームステイをする中で全員（フィリピン 人も含む）が、これまでとは違うモノやヒトに出会い、多様な価値観や考えに触れたはずで、ここで得た知識や経験は、違いを認め相手の感情を汲み取る力を持った人へと成長させたと感じます。他者を理解する力は休憩中や食事での会話を増やし信頼関係を構築し、『失敗しても大丈夫、みんな応援してくれる』といった挑戦しやすい環境を作りました。そういった環境と現地の方の意欲に溢れ物事に主体的に取り組む姿勢が、普段は控えめな子が自ら発言するように成長させたのです。国外活動終盤の Friendship night のオカマオナベコンテストでは、出演する人をみんなで取り合いになるほど積極的な集団になっていました。

とはいえ ISAP10 には、多くの課題が残り改善の余地が多分にあります。特に大きな課題となったのは、多面的な視点をもつことです。現地の現状や私達の技量を十分に理解しないまま、日本人が主役の活動を考えてしまい理想と現実のギャップを生んでしまうことが多々ありました。『相手の事情や実現性を欠いた善意は、相手にとって良いとは限らない。』つまり活動内容を考えていく上で、ニーズや課題を現地の方と一緒に探ることが重要となります。この事実こそが、私達の掲げる「協働」を続けていく必要性を訴えかけています。協働（目標を共有し、共に力を合わせて活動する）が、少しずつ地道に新たな可能性を生み出し続ける活動へと ISAP を導いてくれるのではないのでしょうか。

今回の反省や課題を成長の糧とし、今後の ISAP がこの時代に希望を与える事業として更に大きく育ち、輝きを放つことを願い、実行委員長の総括とさせていただきます。

2019 年 11 月

第 10 回国際協働プロジェクト (ISAP10) 実行委員長 中井颯人

### 3. 企画参加者の感想

私は今回 ISAP10 の参加者として参加致しました、岡山大学教育学部 4 年パウエル井上潤です。

私が ISAP のスタッフを志望した理由は、教育学部生として、小学校の教師になるための勉強をしていますが、教師にとって大切なものは教師になるための勉強だけでは身につけられないと思ったからです。子どもたちに何かを伝えるとき、できるだけ教師が実際に体験したことに基づいて伝えられることで、ただ知識を伝達するのとは違い、より心に残りやすく子供たちの興味や関心の世界を広げられると考え、発展途上国であるフィリピンで実際に約 2 週間を過ごし感じたこと・思ったことなどは子どもたちに自分の言葉伝えられるようになると思い参加者を決めました。また、ニュースなどでは教師の不祥事が目立っている現在、「教師は視野が狭い、社会を知らない」という風潮はますます強まっていると感じ、大学生のうちに様々なものを見て、経験しておくことは非常に大切なことだからです。

ISAP の活動は想像していた以上に、フィリピン人との協働がとても多い活動でした。旅行でもなく、ボランティアでもなく、「これはどうか?」「子どもたちにもっと伝わるためにはこういう言い方はどうか?」などと現地に住むフィリピン人話し合い、一つひとつを一緒にやる活動ばかりでした。「協働」と言葉にすることは簡単ですが、実際は言語のお互いに通じない中、すれ違いがおきてしまうこともありました。その中で、感じたのは、大変当たり前ですが、「誰もすれ違いたいわけではない」ということです。言語が壁となり、うまく伝わらなかつたり語弊を与えてしまい、何か話の食い違いが起きたときに、なぜ相手が自分のことを理解してくれいいのか?と自然と相手を攻めていることが多いと気づきました。しかし、文字に起こしたり、より相手の視点や考え方に合わせて話すことで、少しずつでしたが、意思疎通できるようになり、お互い笑顔を取り戻した時、相手も自分も本当はお互い通じ合いたいということを改めて実感しました。なかなか慣れない環境の中で、相手のこと、自分の本来伝えたいことを見つめ直すことは精神的にも余裕のいることです。いつでもオープンに周りの人とコミュニケーションを取っていくためには、「誰もすれ違いたいわけではない」とお互いを信じ、気持ちの余裕を持って接することの大切さを学びました。

私にとって協働とは双方向で沢山のことを学ぶことが出来る未知の可能性を秘めた活動であるように感じました。ISAP で得た経験は些細なことまで、自分の宝物です。この経験を私の中に留めず、これからの社会を担う子どもたちに少しでも伝えていくことから、たくさんの経験をさせてくれた ISAP とフィリピン人メンバーに恩返しをしていきたいと思っています。

#### 4. 実施状況の写真



みんなでダンスをしている様子



ポイ捨てのレクチャー後の様子



野菜の大切さのレクチャーの様子

## 5 実施した企画の効果と、今後の展開

実施した企画の効果としては、フィリピンに対してと、我々参加した日本人の2点が挙げられる。

<フィリピン及びフィリピン人に対して>

- ・野菜の良いところなどを伝える食育を通じて、少しでも食について興味を持ったり、野菜を残さず食べるきっかけを作ることができた。
- ・衛生教育、手洗いなどを一緒にすることで、どうして手を洗わないといけないのかを知り、家でも実践しやすくすることができた。
- ・栽培企画によって、食べ物はだれかが植えることで育ち、子どもたちと植える中で、栽培する行動自体に興味を持ち、今すぐでなくても、将来的に「栽培・農業」という職業を知るきっかけになった。
- ・ホームステイを通じ、日本人という育ってきた場所も環境も違う人とともに寝食ともに過ごす中で、日本人との関わりから異文化を理解することだったり、フィリピンの生活を説明するなかで、フィリピンでの暮らしをより理解するきっかけを作ることができた。
- ・小学校での work 活動の中で、給食室の拡大をしたことで、今までより多くの児童が給食室で食べられるようにすることができた。

<日本人に対して>

- ・食育の準備を伝えるなかで、食についてもう一度考え直し、食生活の荒れる大学生活で野菜を食べるよさを再認識することができた。
- ・フィリピン人と協働することの難しさをしり、どんな場面においても相互理解が必要であることを知ることができた。
- ・国内で実行委員を含めて20人で準備する中で、それぞれの役職を全うすることの大切さやチームワークで物事が進むことを理解することができた。
- ・実際にフィリピンに行き、生活をするなかで、日本との生活の違いを知り、いろんな暮らしがあることを知ることができた。
- ・フィリピン人との暮らしや小学校での体験を帰国後自分自身の中に留めるだけでなく、他の人に伝えていくことで、発展途上国の現在を周りに伝え影響を与えることができるだろう。

今後、同プロジェクトの第11回の開催が決定しており、実行委員長及び、実行委員が12月現在、準備を進めています。今年度の改善点を見つめ直し、良かった点はさらに伸ばすことで、弊団体唯一の国際協働プログラムとして、日本人、フィリピン人両方に希望与える事業にさらに磨きをかけられるよう計画をしています。来年度のご支援もどうぞよろしくをお願いします。